

## 宿毛市議会 産業厚生常任委員会 平成30年度行政視察報告書

期 間	平成30年11月7日～11月9日		
視察場所	群馬県利根郡川場村 群馬県富岡市		
参加委員	産業厚生常任委員長	山 本	英
	副委員長	山 岡	力
	委 員	川 田	栄 子
	”	高 倉	真 弓
	”	山 上	庄 一
	”	寺 田	公 一
	”	宮 本	有 二
随 行	議会事務局議事係長	宮 本	誉 子

産業厚生常任委員会の所管事務調査のため、群馬県利根郡川場村及び群馬県富岡市を訪問した。調査方法については、先に送付済みの調査項目を基に先方より説明を受けた後、質疑を行うという方法を取り、川場村においては「道の駅 川場田園プラザについて」、富岡市においては「ふれあいの居場所の取り組みについて」の調査を行った。その概要は次のとおりである。

### ◎ 群馬県利根郡川場村

#### 1 村勢・地域概要について

群馬県の北部地域に位置し、日本百名山のひとつ武尊山の南麓に広がり、総面積85.25km<sup>2</sup>で、そのうち森林が83%を占める、大変自然に恵まれた地域である。平成27年度国勢調査での人口は3,647人で高齢化率が40.7%と高くなっている。

交通は上越新幹線やJRでも乗り入れでき、比較的都心からのアクセスに便利な地域となっている。基幹産業は農業であり、川場産コシヒカリをブランド化して「雪ほたか」と銘打って販売し、国際コンクールでも金賞を10回受賞している。他にもこんにゃく芋やりんご等を生産している。

#### 2 農業プラス観光

昭和40年代から昭和50年代にかけて人口が減少し、村存亡の危機感を抱いていた。そこで、交流人口を増やし、村民の所得を上げようと、農業プラス観光という施策を打ち出し、昭和52年からは観光施設の整備に着手している。

### 3 都市交流事業

昭和54年に川場村と東京都世田谷区が縁組協定を結び、交流を続けている。区民健康村づくり計画があり、世田谷区民の第二のふるさとと呼べる自治体を目指し、都会に無くなった、豊かな自然の恵みに触れながら、地方の方々と相互に協力し、都市と農村の交流を深めることを目的に、世田谷区が該当する自治体を探していた。全国52の自治体が手を上げ、その中から川場村が選ばれ、現在も交流を続けている。昭和56年には区民健康村協力協定を結んでいる。これは姉妹提携よりも強い意味合いの協定であり、これを受け、世田谷区と村民が交流する場を設けようと気運が高まり、交流拠点施設の整備を行った。現在では、世田谷区立全小学校5年生が交流施設を訪れ、2泊3日で自然を体験している。また、区民と村民が共に森林保全活動を行う、友好の森事業に関する相互協力協定も結ばれている。



### 4 川場田園プラザ事業

平成4年より整備を開始し、平成8年に道の駅として登録され、平成10年にグランドオープンした。年間180万人訪れる一大観光地となった現在でも、継続して増設やリニューアルを行っている。運営は第3セクターである株式会社田園プラザ川場が指定管理を行い、従業員は社員36名（村民7割）、パート51名（村民3～4割）が働いている。

### 5 質問事項について

#### ①設立のきっかけについて

世田谷区との縁組協定10年を契機に検討委員会が立ち上がり、提案がなされた。1つ目は、交流拠点施設で行ってきた事業を村全域に広げようということ。2つ目は、村の農産物を区民にPR、販売できないかということ。この2つの提案から川場田園プラザが構想された。施設の構想はヨーロッパのタウンサイト（学校、郵便局、レストラン等、コミュニティー機能が集積している場所）をモデルとして立ち上げられた。当初は道の駅構想はなく、世田谷区との交流施設として立ち上げられ、道の駅に合致していたことから後に登録となった。

## ②行政との協働について

施設は村が所有しており、株式会社田園プラザ川場が指定管理を行っている。年間施設管理費として村が株式会社田園プラザ川場に約2,600万円支出しており、反対に株式会社田園プラザ川場からは施設使用料として村に年間約4,200万円の収入がある。また、株式会社田園プラザ川場から寄付金があることもある。

その他、災害時の食料備蓄倉庫を道の駅に置いてあり、観光客を収容する大型避難施設の設置や、ヘリポートの整備も行っている。

## ③施設の概要について

面積は約9haあり、園内は公園のような開放的な空間が広がっている。新鮮野菜や加工品、飲食店、子供たちが遊ぶ場や陶芸体験等の施設もある。夏には園内のブルーベリー公園で無料摘み取りも行える。このように滞在型の道の駅として、大変充実しているとお客様に評価いただいている。

## ④現状に至るまで経緯について

当初は赤字経営が続き、厳しい状況が続いていた。平成19年に新しい社長が就任し、スタッフの教育を中心に、抜本的な改革を行った結果、現在のような年間180万人が来場する道の駅となった。人気の理由は、お客様を飽きさせない経営を常に行っているということで、広大な敷地に様々な店舗が並び、1日家族で楽しめることが理由としてあげられる。

## ⑤地域活動貢献や縁組協定

村民の雇用創出の場、農産物のPRや販売を行い、村民の所得向上や生きがいがづくりにつながっている。また、川場村の知名度の向上にも役立っている。縁組協定は今年で37年目を迎え、世田谷区のふるさと交流課の職員に毎月川場村を訪れてもらい、幹事会を行い、今後の交流事業について協議を行っている。

## 6 道の駅 川場田園プラザ

### (1) 川場田園プラザの概要について



東京ドーム1.5個分の敷地の中に18店舗が営業している。来場者の7割が首都圏からで、うち4割がコアリピーターで年に3~4回、3年以内に5回以上来ている方がおり、ここをターゲットとしている。年商は20億円であり、そのうちファーマーズマーケット

が年間5～6億円の売り上げがある。昨年のデータではあるが登録農家の年間収入100～200万円の方が約80名。200～300万円が7名。400～600万円が9名いる。300万円以上売り上げる方は主軸があり、主に果物でりんごやブルーベリーなどがある。果物を主軸で販売しながら、プラス他に何か野菜等を常に生産し、販売している。JAとは取引せず、村内の農家を大切にしたいので、村外の方は同じ品物でも、マージンを高く設定し、それでも道の駅で出したいということであれば受け入れている。村内の農家を守り、農家も道の駅に出したいと、互いの信頼関係を大切にしている。

## (2) 顧客獲得の戦略について

平日と休日の営業時間を変えており、お客の層が平日と休日で変わるので、そういったお客の消費行動に合わせた時間帯を調べて設定している。

また、旅行業者は相手にしていない。コアリピーターを大切にしているので、観光バスの駐車場は6台分しかなく、予約は受け付けていない。添乗員の休憩所もないし、謝礼も無い。お年寄りから子供まで家族で来ていただいて1日楽しめる施設づくりを目指している。

ユニフォームや食器等を3年に1度変えている。メニューは1年に1度見直しを行っており、定番商品も味を変えている。各飲食店では、必ず季節感のある物を取り入れ、その季節に提供している。

店舗の中にはお客様からのアンケートを元に作られたものもある。例えば自分用ではなく、知人に贈り物として渡せるような商品が欲しいという要望を受け、より素材にこだわった定番商品であるアップルパイやヨーグルトを販売する店や、週末になると1時間以上待つレストランが出てくるので、気軽に食べられる物が欲しいという声を受け、ブランド米である雪ほたかを使用したおにぎり屋を作り、年間9万個（1日平均で約250個）を売り上げている。



## (3) 研修について

研修先は東京ディズニーランドであるが、乗り物に乗ってはダメというルールが1つだけ課されている。他部署の人とグループになり、くまなく園内を視察する。トイレ、迷子の場所、忘れ物の場所、レストラン、スタッフの対応等を見て、道の駅に使えるものを探し、それを取り入れるようにしている。

また、施設改修においても東京ディズニーランドは全てを変えるのではなく、少しずつアトラクションを変えるなどしている。その方法は道の駅にも通じるので、基本軸は残しつつ、中を少しリニューアルしたり、レストランを何年かに1度、ガラリと変えてみたりしている。これからも変化していく予定である。先行投資はかかるが、それ以上の収入を見込んでいる。

## ◎ 群馬県富岡市

### 1 市勢・地域概要について

群馬県の南西部に位置する、人口約49,000人の市である。三方を山に囲まれ、面積122.8km<sup>2</sup>、四季の変化に富み、自然豊かで、風光明媚な地域である。旧妙義町と旧富岡市が合併後11年が経過し、年間500人ほど減少し



過疎化が進んでいる。観光地を元々持っていない市であり、試行錯誤しているところである。養蚕業も昔から盛んで、明治時代に輸出商品の模範的な工場として、富岡製糸場ができ、昭和62年まで操業していた。平成26年に富岡製糸場と絹産業遺産群が世界遺産に認定され、同年、国宝にも指定されている。

### 2 ふれあいの居場所

高齢化が進む中、住民同士がふれあい、支え合う、絆のある地域づくりを推進するため、ふれあいの居場所づくりを進めてきた。平成23年度から行政と市民の協働により開始され、まず富岡市主催の勉強会が3回実施された。その後、参加者の中から更なる勉強がしたいという声上がり、行政に連絡し勉強会や施設見学を行った。その中には今回訪問した「うだん家」の運営者も居た。その方は、子供から障害者まで受け入れられるような施設にしたいということで自宅を改修し、運営を始められた。当初は試行錯誤しながらも、仲間と意見交換しつつやっていたが、現在では地域の人たちが集い、要支援の人も含めた施設運営をしている。できることをできる人が無理なくやろうというのがモットーである。参加者もできることは自分でやり、全員参加型で事業を行っている。また、ネットワーク連絡会を立ち上げ、皆で交流し、共助を行っている。ふれあいの居場所を設置したものの、何をしたらよいかわからない状況になっ

た時、ネットワーク連絡会が手助けし、地域の実情に合わせた取り組みを行っている。よって、子ども食堂や学習支援、高齢者の就労支援をしているふれあいの居場所もある。

### 3 行政の支援（支援者の声）

開設当初に改修等に30万円、物品購入に10万円の補助があった。本当のところ光熱水費くらいは出してもらいたいという気持ちはあるが、皆で知恵を出し、どこまでやれるかやっていききたいという思いもある。あるふれあいの居場所は古紙を有価物として収集し、利益を得たりしている。また、区から補助金をもらい無料で開催したところもあったが、無料では来づらいので、料金を取ってほしいとの利用者から要望を受け、材料費（100円～300円程）だけ、受け取るようにしたところもある。廃品回収など、各居場所が自主努力をし、お金を集めて運営している。

### 4 今後の担い手

今後の課題としては、勉強会から7年が経過し、70歳だった運営者も77歳になり、段々運営が難しくなっていることである。

ある地区では地区長がふれあいの居場所の事業運営をしている。それは地区長が交代しても同じ事業が継続されている。それを他地区にも広げるべく、継続の推進を地域に出向いて進めているところである。

また、ふれあいの居場所の方々に協力を願い、おつきりこみという伝統食を使った、おつきりんピックという大会を開催した。地区長や地元高校生、県外の大学生の若い知恵をお借りし、相互の交流を深めながら伝統食をPRしていった。将来の富岡市を担う富岡実業高等学校の生徒には、ゆくゆくは自分たちでこのような事業やふれあいの居場所の事を考えてもらいたいとの願いも込めて参加してもらった。



### 5 効果

人との交流により、引きこもり・孤独死・虐待の予防ができ、さらには情報交換することで詐欺や消費者被害の防止につながっていると考えられる。人付き合いの少ない孤立高齢者は介護・死亡率が通常の1.7倍であると地元新聞

に掲載されていた。要介護にならないように、ふれあいの居場所を通して健康になるよう取り組みしていかなければならない。また、利用者自らも参加することにより生きがいつくりの場、社会貢献活動の場となっている。地域にあることで人と人とのつながりができ住民同士が支え合う地域社会を作ることができている。

## **6 住民同士のつながり**

こうした住民同士の支え合いの重要性が、地域において徐々に理解されつつあり、ふれあいの居場所の必要性の理解が進みつつある。皆が主役で、いつまでも住み慣れた地域で長く楽しく暮らしていけるよう取り組みしたいと語られていた。